

子供の領分

モニック・ウィティッグ
小佐井伸二訳

新しい世界の文学

白水社

新しい世界の文学
子供の領分 43

定価 五〇〇円

一九六六年二月一日印刷
一九六六年二月二〇日発行

訳者 ① 小佐井伸二

発行者 草野貞之

印刷者 田中昭三

発行所 株式会社白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京(291)七八一一(代)
振替東京三三二二八

訳者略歴

一九三三年生
一九五五年京大仏文科卒

青山学院大講師

主要訳書

モーパッサン「女の一生」
チャールズ・モーガン「泉」

子供の領分

Monique Wittig

L'Opoponax

© Editions de Minuit 1964

Copyright in Japan by Librairie Hakusuisha

モニック・ウィティッグ
小佐井伸二訳

白水社

ロベール・ペーヤンという男の子が一番あとから教室にはいつて来る。ぼくのおちんちん見たいひと、だあれ、ぼくのおちんちん見たいひと、だあれ、と大きな声で言いながら。その子はズボンのボタンをかけているところ。その子は茶色の毛のソックスをはいている。先生が、お黙りって言う、どうしてあなたはいつも一番あとから来るの。ロベールは道を渡るだけでいいのに、いつも一番あとから来るのだ。その子の家は校門から見えていて、家の前に二、三本の本が立っている。ときどき、遊び時間に、お母さんがその子をお呼ぶ。お母さんは一番高い窓から、木の梢ごしにその子を見つめる。シーツが壁にかかっている。ロベール、襟巻えりまきをとりにおいで。お母さんはみんなに聞こえるような大きな声で言う。けれどもロベール・ペーヤンは返事をしない。そこでロベールをお呼ぶ声がいつまでも聞こえる。カトリクス・ルグランがはじめて学校へ来たとき、運動場の金網に沿って草が生え、リラの花が咲いているのが道から見えた。菱形模様を描いているその光った金網は、雨が降るとしずくが

伝つて、すみっこに垂れていた。金網はカトリリーヌ・ルグランより背が高い。カトリリーヌ・ルグランはお母さんの手を握る。お母さんは校門を押しあける。たくさんの子が校庭で遊んでいる。でもおとなはひとりもない、カトリリーヌ・ルグランのお母さんだけ。お母さんは学校のなかへはいらないほうがいいのに。学校は子供たちだけのもの。お母さんに言わなければいけない、お母さんに言わなければいけないかしら。学校のなかはとても広い。机がたくさんある。大きな丸いストーブがある。そのまわりにも菱形模様の金網。天井にとどくほどの煙突。ところどころにひびがいつている。先生が、窓にたてかけた梯子はしの上にいる。何かしている。一番上のガラス窓を閉めようとしているのだ。カトリリーヌ・ルグランのお母さんは、今日は、先生、と言う。すると先生はおりてくる。小さいカトリリーヌの手をとると、先生はお母さんに帰るように言う、みんなが気づかないうちに、カトリリーヌが泣いたりなどしないうちに。カトリリーヌ・ルグランは運動場から聞こえてくるにぎやかな声を聞く。どうしてほかの子供たちといっしょにしてくれないのかしら。きつと、カトリリーヌがほんとうはまだ学校へあがれないからだ。もしこれが学校なら、ほんとうにびっくりすることなんだから。学校は家に似ている、家よりも大きいということは別にして。ときどき午後に子供たちは寝かしつけられる。けれど、たぬき寝入りする。テーブルの上に手を組み、組んだ手に顔をう

ずめる。目を閉じる。おしゃべりをしてはいけない。カトリヌ・ルグランはときどき片目をあける。でもそれもいけないのだ。いつも並んで歌をうたう、わたしの右手にばらの木があつて五月になると花を咲かせる。すると、右手を見せる。カトリヌ・ルグランは右手のほうを見る。五月になつていないんだわ。だからばらの木はまだ芽を出していなかった。それからおやつ。みんなバスケットをもつていて、四時になると、先生がみんなのバスケットを腕にかかえて大きな声で言う、このバスケットはだれのですか。自分のときは、わたしの、つて答える。なかにはパンがひとつ、チョコレートの棒がひとつ、りんごかオレンジがひとつはいつている。カトリヌ・ルグランはいつも登校の途中、りんごを食べる。食べてはいけないのだが、手がでてしまう。ときどきカトリヌはかじるだけでがまんする。すると先生が言う、半分かじつたりんごのいつているバスケットはだれのですか。カトリヌはおやつ時間の前にりんごかオレンジを食べたか食べなかったか、わざと思ひ出さないようにする。びっくりしてみたくて。それとも、もしほんとうに忘れているあいだにりんごが偶然もとのままになつていたらどうだろう。カトリヌ・ルグランはいんちきする。でも、それが遊びでないことはよく知つてゐる。すっかり忘れていられたことは一度もなかったから。また、りんごがいつていないか、はいつていても芯しんのようなものしか残つていない、

自分のバスケットを渡されても、ほんの少しびっくりするだけだから。いずれにしろ、カトリヌは自分のバスケットがどうなっているか忘れることができたためしはない。先生はオレンジの皮をむく。ナイフで、皮を同心円を描くようにむいてゆく。皮は輪になって落ちる。むき終わると先生はドアに輪がぶらさがる。それにさわると、丸く動く。先生はそれを書くことができた皮を、ドアに輪がぶらさがる。それにさわると、丸く動く。先生はそれを書くことができない。ふとっているのでブリジットという女の子がカトリヌ・ルグランの首をつかむ。カトリヌ・ルグランはブリジットに笑いかける。ブリジットのふたつの頬ほおがそれぞれはなれて、それからまたすごいやさで口のそばにもどってくる。ブリジットはカトリヌ・ルグランの首をひっぱる。顔を真赤にする。それから首を押つけて、なおひっぱりながら床ゆかすれすれにまでからだを曲げる。カトリヌ・ルグランは倒れて腹ばいになる。それから立ちあがる。ブリジットというふとった女の子は、また近づいてくる。カトリヌはもう笑いかけない。こんどは覚悟している。ふたたびブリジットはひっぱる。ブリジットのふたつの頬ほおがはなれ、ふくれる。顔がすぐそばに寄る。ブリジットはねずみ色の髪をしている。ひっぱるときブリジットは力が強い。カトリヌはすぐ腹ばいになって、泣きだす。すると、涙が床のすじを流れる。立ちあがってはいけない。さもないと、また同じことにな

る。みんなが先生についてくりかえす、六十八、六十九。みんなは数える。七十、七十一。先生はベルギー生まれだ。七十を、ソアサント・ディスと言わずに、セプタントと言う。みんなは数える。一からまたはじめる。一、二、三。草のなかで鬼ごっこをする。はやく走っていった、何かその上にあがれるものを見つけないければ。疲れてしまうと、やーめたと言って、親指をあげる。カトリヌ・ルグランは柵の上にのぼっている。ズロースが釘にひっかかってあつというまに破れる。ぴりっ。カトリヌ・ルグランは柵からおりと、やーめたと大きな声で言いながら用心して走る。泣きたい。だれにも何も見られなかった。たとえほかの子が知らなくても、ズロースをはかずに遊びをつづけることなんかできない。カトリヌ・ルグランは先生のまわりを何も言わないでまわる。ちょうど、パジャマのままで、あるいは服を着るのを忘れてはだかのままで、表を歩いている夢をみているときのようだ。カトリヌ・ルグランはだれかが近づくと、やーめたと言う。先生がズロースを脱がして、直してくれる。カトリヌ・ルグランは先生のそばでじっとしている。向こうでは、子供たちが走りつづけている。ジャクリヌ・マルシャンという女の子がやーめたと言って、親指をあげる。雨が降っている。みんなは教室のなかで遊ぶ。そばに坐っているギイ・ロマンという男の子の手をとる。椅子の上にまたがって、歌う、ママ、小さなお舟が水の上をゆく。お互

いにからだを傾けて舟のまねをする。そんなふうにして、先生が遊び時間の終わりの合図をしたのを見ないふりをする。すると、右と左のほったに平手打ちをもらう。びしゃりという音がして頭がぐらつく。お休みのあいだは退屈だ。カトリヌ・ルグランは庭のなかをぐるぐるまわる。格子の門のところまで行って道を通るひとびとを見る。通行人はほとんどいない。まして子供はほとんどいない。溝のなかに桃やプラムの種子がいくつか見える。庭の外にこっそり脱け出し、道を少し歩く。歩道のはしを、へりに並んだ石が描いている線を踏まずに、歩く。踏んでしまう。だれにも見つけられずにもどって来る。空は灰色。雨が降り出しそう。それとも、日が照りはじめるのかしら。こんなお天気のことにはおかしな匂いがする。まるで頭の上に目に見えない湿った草があるかのようだ。きつと太陽はもっと明るい雲のうしろに顔を出すだろう。カトリヌ・ルグランは目を閉じて歩く。目をあけて見たいという誘惑に負けないようにまぶたを両手でおさえる。カトリヌ・ルグランは時間をかけて並木道をのぼってゆく。とてもゆっくり歩く。そのために、靴よりも短い歩幅をとる。大事なものは左足を右足のすぐ前に出すようにすることだ。それには左足の靴のかかとが右足の靴の先にあつかるようにすればいい。自分が今どのあたりにいるのか知るために地面を見るときはほんの少し目をあける。でも、あくまでほんの少し。並木道のはずれに來たら、

反対の方向へまた歩き出す、相変わらず目は閉じたまま。そうして並木道をまたもどって来る。カトリーヌ・ルグランは歩く。一歩足をすすめるたびに、お日さま、お日さまと言いながら。もどって来たら、顔から手ははずしてもいい。きっと雲のうしろにお日さまが見えるだろう。ごはんを食べている。お祖父^{じい}さんの発作について話している。お祖父さんはもう右のわき腹を動かせない。片目もつむったきり、そのために唇がひきつっている。お父さんとお母さんがカトリーヌを見る。話ができない。右のわき腹が椅子の上をすべってカトリーヌ・ルグランをひきずる。カトリーヌのからだが傾いてわき腹にひきずられる。カトリーヌが椅子と床^{ゆか}とのあいだに見える。カトリーヌはそのあいだにはさまれたまま。あがることもおりることもできない。床を見ている。機械人形のようにぎごちなくゆれる。カトリーヌ・ルグランはやられたのだ。そいつは椅子を伝ってあがってきた、だれもカトリーヌを見ないで食べているあいだに。そこで今お父さんとお母さんの目の下でやりあっているのだ。お父さんとお母さんは動かずにカトリーヌを見ている。カトリーヌを助けることはできない。カトリーヌはひとりきりだ。カトリーヌ・ルグランはせめて口のなかに言葉をひきあげようとしてみる。おそろしい努力。言葉はやっとわめき声となって出る。庭が水びたしになっている。病気になる、窓から木の枝が見える。頭の下にまくらが二つ。同時に坐ったり寝たり

するために。お母さんが言う、うそを見てごらん。どこ、お母さん、ねえ、どこ。はやく、あそこを、あの木の又またを、あの桜の木の上を。カトリヌ・ルグランは起きあがる。下のほう、地面は桜の木から散ったたくさんのお花のびらで真黒だ。お花は今晚散っちゃったわ、お母さん。イネスという大きな女の子がカトリヌ・ルグランをさそいに来る。カトリヌ・ルグランを学校へ連れていってくれる。ほかの子もいっしょ。お母さんが言う、町の子ね。国道を歩いて、プリミステールの丘のところで横断。イネスが言う、お母さんがお仕事しているのはあすこよ。小さな道に出る。菱形模様の高い金網に、リラの葉っぱと赤いダリヤとが茂っている。小さな牧場にマニエさんの牝馬めうまが頭をさげて立っている、今にも柵に向かつて全速力で駆け出そうと。行きどまりの道は、自転車が通る。冬は毛のソックスをはく。腿ももは風のために赤くひびがきれる。先生と体操場で丸くなってお遊戯をする。先生にきく、先生のおむこさんはどこにいますか。先生は指で空をさしながら天にと言う。空を見る。何も見えない。先生のおむこさんは見えない、と先生に言う。先生は答えない。しつこく言う、と、見えなくても別に不思議ではないと、先生は答える、あんなに雲があるのだから。先生のおむこさんは雲のうしろの肘掛椅子ひじかけいすに坐っている。それでも、きつとおひるには新聞をもってお家に帰ってくるだろう。くちぐちに言う、きつと帰ってくるわ、帰ってこないわ、

いいえ帰ってくる、絶対に帰ってこないわ、だって死んだのですもの、いいえ死んでなんかいない、でも死んだひとはどこにおくのか、穴のなか、それでも死んだひとは天へゆくのか？
いちども海に出たことのない小さな舟がありました。散歩にゆく。上っ張りを着ない。オーバーにマフラーをしてゆく。先生はおやつのかばんが全部はいつてゐる大きな籠かごをさげてゆく。草の上に坐る。小石で遊ぶ。わたしの手のなかに石がいくつあるか。先生はなぞなぞをかける。わたしは金属です、わたしはつばさをもっています、わたしは野原にいます、そしてわたしのぜんたいが色鉛筆です。家のそばに住んでいるアラン・トレヴィズという男の子が絵本をもっている。そのなかにトータムがいくつも描いてある。それは黄と赤と青の動物たちで、それが一匹一匹つなぎあわさってひとつの動物になっている。それは黄と赤と青の一本の柱に似ている。でも柱じゃない、それは飛ぶのだ。カトリヌ・ルグランは夕方学校から帰るときトータムにおそわれないか、こわい。イネスという大きな女の子が言う、馬鹿ね、いまごろは飛ぶわ。でもきつと飛ぶわ。わたしは見たことないもの、この地方にはきつといないのよ。地方ってなかに。人がいるところ。人がいないところは地方ではないの。ないわ。だったら、人がいないところが地方でないなら、人がいないところにはトータムはいないわ。わからない。だったら、人がいるところは地方で、トータムがい

るわ。そうね、でも、わたしがいっしょにいれば、あんたに何もしないわ。カトリーヌ・ルグランはイネスという大きな女の子の手を放さない。何がおこるかわからないから。走らなければならぬのに、カトリーヌ・ルグランはうまく走れない。いつもあとになる。牧場のなかを通るとき、大きな声で話さないように気をつける。有刺鉄線の下を腹ばいになって通る。でも、通り抜け禁止。罰金をとられるかもしれない。見つからないように、牧場のまんなかに積みあげられた干し草のなかにかくれる。イネスという大きな女の子とアラン・トレヴィズという男の子といっしょだ。干し草のなかでだれの手にさわったのか当てっこする。アラン・トレヴィズという男の子はあばれまわる。その男の子の何かにさわった。まだ当てっこしているあいだに、イネスは干し草から出て走ってゆく。悪魔のけもの、悪魔のけもの、って叫んでいるのが聞こえる。めくらめっぽうに走り出す。カトリーヌ・ルグランはあとになり、ころんではおき、おきてはころんで泣きながら走る。ほかの子にどうしても追いつけない。ほかの子はどうしてそんなにはやく走っていったのかしら。悪魔のけものって何。悪魔がそこにいるとき、それはけもの。悪魔のけもの。そう、悪魔は子どもたちをさらってゆこうとする。でも、なぜ子どもたちをさらってゆくのかしら。何も悪いことをしないのに。カトリーヌ・ルグランとほかの子とのあいだには原っぱがずっとひろがっている。

カトリヌ・ルグランは背丈すれすれに切られた草のなかに落ちる。ちくちく刺す。カトリヌ・ルグランがふりむくと、悪魔のけものは見えない。とても不思議。きつとそれは見えないけものなのだ。それともイネスみたいに大きくなるまで待てば、どうやってそれを見つめるかわかるようになるのかしら。きつと干し草のなかにひなげしか矢車菊の花があるとき、それとも木の枝があるとき、なのだ。また走り出さなければならぬ。けものが見えないというのは、きつとそこいらじゅうにいるからなんだ。これからはもう走ってはいけないのだ。ともかくイネスのような大きな女の子がこわがるのだから重大なことなのだ。文章を大きな声で読む。こなひき場のこなひきの妻がとうもろこしをこなにひきます。夫のこなひきがひつじをひいていきます。ひつじはこなひきの妻のとうもろこしをたべます。教科書にこなひきの妻より大きなひつじが一頭かいてある。ひつじはからだじゅう白いこぶがある。羊毛だ。リリアヌがリンネルを洗います。先生について言う。リリアヌがリンネルを洗います。先生は本に書いてあることを黒板に写す。先生は大きな木の定規で、一音一音つづりをさす。どこか発音がおかしいと、黒板をたたく。つづりの一字一字をおさえながら、リンネルという言葉、ランジュのはじめの音をくりかえす、ラン、ラン、もういちど、ラン。カトリヌ・ルグランは雪靴をもっている。先生はそれを雨降りや雪の日にストーブの前で